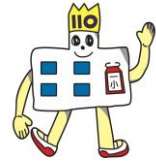




武蔵村山市立第一小学校 学校だより



令和7年1月31日

コーヒーの木に諭されて

校長 押本 純樹

過保護にしたばかりに葉が落ちてしまいました。鉢植えのコーヒーの木を育てているのですが、親心から良かれと思ってしたことが、余計でした。温かい部屋から寝室に行こうとした時のことです。気温は、明け方に向けてだんだん下っていきます。冬の寒さが気になりました。寒さに弱い木です。少しでも温かくと思い、電源を切ったばかりの電気ストーブの余熱をコーヒーの木に近づけて、床に就きました。

翌朝、雨戸を開け、コーヒーの木を見ると、それまで青々としていた緑色の葉が、濁り淀んだ色になっていました。寒さのためかとも思いましたが、その位置からして電気ストーブのせいだと分かりました。余熱とは言え、熱くて耐えられなかったようです。コーヒーの木に悪いことをしてしまいました。熱で焼けた葉は、その後、茶色くなってしまいました。幸い部分的だったので、木全体が枯れることはありませんでしたが、まだまだ小さい木なので痛々しさを感じました。

植物は、人間の言葉を話すことはできません。電気ストーブを向けたとき、「熱いよ。」とでも言ってくれたら良かったのにと思うところですが、それは無理な願いです。そして、この言葉が通じない、もやもやした関係は、子育てや教育にも当てはまるような気がしました。子供は弱者です。より多くのことを学ばなければならないこともあり、どうしても受け身の立場になります。まして、普段から面倒を見てくれる者からの言葉や指導となれば、素直に聞き入れざるを得ないところがあります。自分の思いを自分の言葉で相手に伝えることは、大人でも苦手にするところです。だからこそ、教育が成り立つのかもしれないかもしれませんが、要らぬ手出しは、当の子供の成長に悪影響を及ぼし、その芽を摘んでしまいかねません。

コーヒーの木も、それまでは少々寒くてもツヤのある葉を広げていました。それにもかかわらず、もっと早く大きくなれという欲というのか、かわいそうにと勝手に決め込んだ無知というのか、どこか見下した思いが私にはあったようです。今にして思えば、もっとコーヒーの木を信じるだけで良かったのです。それができませんでした。

植物なら水、気温、日光といった基本的な栽培環境を整えた後は、その種が本来持っている生きる力を信じる度量が必要だと改めて感じました。何気なくとも寄り添い過ぎは、成長を妨げました。コーヒーの木から「子供も同じではないか。よくよく何を求めているのかを見極め、どうするか、その匙加減を間違えてはならず。」と諭された気がします。今は適度に水やりをするだけにして、互いに温くなる春を待っています。



枯れ落ちたコーヒーの葉